都留文科大学研究紀要　第81集（2015年3月）
The Tsuru University Review, No.81（March, 2015）

評伝 矢内原忠雄 (七)

A Critical Biography of YANAIHARA Tadao (Part 7)

関口安義
SEKIGUCHI Yasuyoshi

第七章　試練の中での研究生活

一　帰国と妻の死

留学期間を三ヶ月延長した矢内原忠雄は、一九二二（大正一一）年の年末までパリに滞在した。残る視察国はアメリカである。当時の留学生の多くはヨーロッパで研修の後、アメリカ経由で帰国するのが常であった。彼も留学当初からその予定でいた。が、その間にフランスが滞在国の一つに加わったのは、彼にとって幸いであった。見聞を広めるまたとない機会であったからだ。彼はパリで、ルーヴルをはじめとする美術館通いの日々を過ごした後、最後の研修地、アメリカへと向かった。一九二二年の年の瀬であった。

彼はまずニューヨークへ行くことにした。当時のアメリカは、狂騒の二十年代（Roaring Twenties）と呼ばれる時代の幕開けであった。第一次世界大戦後、世界の経済はもとより、芸術・文化の中心は、ニューヨークを中心とするアメリカに移り、各都市は、経済的・文化的に繁栄し、アメリカは世界で最も富める国となっていた。自動車・映画・放送（ラジオ）、それに化学産業が急成長した時代であった。矢内原忠雄は、そうしたアメリカの現状を確認しようと、中心都市のニューヨークを訪れようとしたのである。ニューヨークは、大西洋岸のハドソン河口に位置する世界屈指の大都会で、そこには、一高基督教青年会時代の仲間であった長崎太郎がいた。仲間づきあいを大切にした忠雄は、ニューヨークに着いたらまず第一になつかしい友、長崎太郎を訪ねようと思った。筆まめな彼は、思い立

つとすぐ日本郵船ニューヨーク支店気付で、到着したらすぐ支社に訪ねると知らせたに違いない。

長崎太郎は京都帝国大学法科大学政治学科を、一九一七（大正六）年七月十三日に卒業した。旧規定による卒業である。『官報』（第一四九〇号、一九一七・七・一九）によると、政治学科（旧規程）六十四名中順位八番の成績である。旧規定というのは、すでに矢内原忠雄の東京帝国大学卒業とからんで、第五章で触れているので参照してほしい。卒業翌月の八月一日付で、長崎太郎は日本郵船株式会社に入社、横浜支店に勤務する。教育界で働くことを願っていた彼が、なぜ日本郵船に勤務したかの詳細は、小著『評伝長崎太郎』[1]を見ていただけるなら納得できるはずだ。かいつまんで書くなら、彼は一高時代から将来は教育界で働くという夢をもっていた。が、若い間に日本を出て外国から日本を見る必要を、一高時代に校長の新渡戸稲造から教えられていた。長崎太郎の『佐々木惣一先生と私』[2]には、そのことが何度も語られている。

日本郵船は日本有数の大規模の船隊をもった海運会社で、当時発展途上にあった。第一次世界大戦の最中にあって、海運会社はどこも好況の波に乗っていた。船成金ということばさえ出来た時代であり、日本郵船は利益をあげた筆頭に属した。その結果西回り世界一周やニューヨーク、ニュージーランド、南米東岸、欧州航路などが開設されていた。旅は船舶の時代であり、飛行機での移動など、未だ考えられない時代であった。長崎太郎は第一次世界大戦の終わりの頃の、全盛期の日本郵船に就職したのである。それは同じ年、東京帝国大学法科大学経済学科を卒業し、有力企業であった住友の別子銅山に就職した矢内原忠雄の歩みにもどこか似ていた。

日本郵船横浜支店に勤務した長崎太郎は、海外に出られる機会をねらって英語の勉強に励んだ。英語は高知県立第三中学校（現、高知県立安芸高等学校）時代からの得意な科目であり、読むことばかりか、書くことも話すことも彼は好きだった。横浜支店に勤務して二年半、一九二〇（大正九）年に日本郵船ニューヨーク支店の開設が決まると、社は長崎太郎にニューヨーク支店勤務を命じる。彼は妻子を日本に置いて、四月二日、横浜から伏見丸に乗ってアメリカへ向かった。若い社員の妻子同伴など考えられない時代であった。

日本郵船ニューヨーク支店での長崎太郎の仕事は、新規事業の開拓と顧客の獲得にあった。彼はそれらの仕事に誠実に当たる一方で、美術館めぐりをし、また、ニューヨークの古書店を漁（あさ）っては、古書の収集に精を出す。絵や古書への関心は、一高時代からのものだった。矢内原忠雄がヨーロッパ留学中、現地の大学に籍を置くこともなく、ひたすら、旅と美術館通いを日課としたように、長崎太郎も仕事に慣れると、ニューヨークの数多い美術館や古書店ばかりか、出張先でも美術館に入り、古書店街をめぐった。特にニューヨークのメトロポリタン美術館に惹かれ、週末には必ず通うほどであった。後年、京都市立美術大学（現、京都市立芸術大学）初代学長として多くの画家や陶芸家を育てた長崎太郎の始原は、ここに求められるのである。

メトロポリタン美術館は、マンハッタン区のセントラル・パークの東側、五番街に面した大美術館である。収集品の規模はロンドンの大英博物館、パリのルーヴル美術館に匹敵する。それゆえ一日で見終えるものではない。中学時代から絵を好み、一高時代には恒藤恭に大下藤次郎ばりの水彩画の手ほどきを受け、京大時代にもしば

しば絵筆を握った長崎太郎は、絵には目がなかった。恒藤恭宛はがきの何枚かには、水彩画を添えたものがある。彼は心底から絵が好きだった。日本郵船ニューヨーク支店での日々は、メトロポリタン美術館をはじめとする市内の美術館めぐりの日々でもあった。「費府（フィラデルフィア）より」（発表紙不明）と題した新聞切り抜きの文章が、遺族宅に残っている。そこの一節に「アメリカは金持ちの国だけに、モネ、マネ、ドガ、セザンヌ、シャバンヌ、ゴーガンなどの絵を、かなり豊富に買ひ込んでゐる。それらに接することは私にとつて嬉しいことの一つである」とある。彼は出張先のシカゴやボストンでも博物館や美術館を見てまわる。また、ニューヨークでは、古書店めぐりも日課としていた。

第一次世界大戦後、世界経済の中心がアメリカに移ったこともあって、ニューヨークにはヨーロッパからの稀覯本が流れ込んでいた。彼は昼休みの一時間を利用して、毎日地下鉄で一街一街と北に上って古書店を漁（あさ）り歩いた。マンハッタン島の古書店は、いつの間にか残らず知るようになったという。そうした中で、一高時代から彼の好みだったウイリアム・ブレークが、第一の収集の対象となっていく。革命的でありながら、神秘主義的傾向を帯びるブレークは、長崎太郎好みの芸術家であった。いや彼ばかりでははない。すでに述べたが、イギリス時代の矢内原忠雄も、一高同期の芥川龍之介・井川恭（恒藤恭）・成瀬正一らも、皆ブレークのファンであった。白樺派の柳宗悦・志賀直哉・武者小路実篤らもブレークに傾倒し、雑誌『白樺』主催によるブレークの展覧会すら開いている。ニューヨークで長崎太郎は、時間があると古書店にせっせと通い、ブレークの詩や版画を集めはじめた。大戦後の日本円の為替レートは高く、彼の収集に利するものがあった。後年日本のブレーク・コレクターと呼ばれるようになる長崎太郎の誕生である。

矢内原忠雄がこうした状況のもとにあった長崎太郎を訪れたのは、ニューヨーク到着早々の一九二三（大正一二）年一月二日、火曜日のことであった。日本では新年の三箇日は休むが、アメリカでは元日は休むが、二日からは、どこも営業する。会社ばかりか公的機関も業務を開始する。大学図書館なども、二日からは平常通り開館するのが慣行だ。忠雄はそのことを知っており、マンハッタンの日本郵船ニューヨーク支店を訪れたのである。一高基督教青年会に所属していた頃は、毎日のように会っていた二人が、ニューヨークで再会するのも、新渡戸稲造校長の〈若き日に外国を見よ〉の教えの賜物であった。この日の長崎太郎の日記（ご遺族長崎陽吉氏保存）には、「欧州よりの帰途にある矢内原君にあつた」にはじまる。「矢内原君は少し肥えて見えた。学者らしい風采になつた」ともある。長崎太郎には、矢内原忠雄が輝いて見えた。長崎太郎が教育界に転身するのは、忠雄やこの後訪れる京大時代の友人田村徳治（当時京大助教授）と再会したことによる。

かつて『評伝長崎太郎』（日本エディタースクール出版部、二〇一〇・一〇）を刊行した時は、ご遺族の長崎陽吉氏がワープロに起こした長崎日記の文章を利用させていただいたが、今回は日記の現物そのものをお借りすることができたので、私の責任で翻刻したものを用いる。日記帳は市販のもので、一九二三年のものには、*The Year 1923* とあり、現地ニューヨークで刊行されたもの。総革表紙、天地側面金箔押し（17.5×10.5）の立派なものである。一日一ページ、*Monday Jan 1* にはじまり、*Monday Dec 31* に終わる。長崎太郎は一

日も休まず、時に欄外までびっしり、その日あったことを記している。わたしがお借りした滞米時代の「長崎日記」は、一九二三～二四年の二冊である。一九二四年の *The Year 1924* と印刷された上部には、*To my dear freiend Mr. T. Nagasaki, Hideo Iida* のサインがある。それにしても、よくぞ激動の大正・昭和を経て平成の今日まで残されたものである。しかも、日記は異国の地、アメリカで記され、日本に持ち帰ったものである。故人、およびご遺族の方々に感謝しつつ、その記録の一端を使わせていただく。なお、日記帳の表紙裏には、それぞれの年のカレンダーが印刷されているので、その年の曜日も簡単に特定できる。

さて、久しぶりに矢内原忠雄と再会した長崎太郎は、ニューヨークの中心街、ウォール街を案内する。「長崎日記」には、「市原（筆者注、日本郵船の同僚か）と三人で午めしを食つてWall Streetに行き、Worworth Buildingに昇つた。空は晴れて居たが、ガスがかゝつてあまり遠くはのぞめなかつた。四十二丁目のCity Libralyでbibleの展覧会を見た」とある。地上一〇二階のエンパイア・ステート・ビルが完成するのは、一九三一年のことで、当時はまだ建っていなかったことになる。建築ラッシュの摩天楼や市立図書館でのBibleの展覧会など、矢内原忠雄にはぴったりの歓迎だ。その夜はHotel Penで夕食をし、「四十二丁目のApolls劇場」で観劇を楽しんだ。

長崎太郎は一高時代の旧友を心からもてなした。一日つきあった矢内原忠雄への感想は、先にも記したが、「矢内原君は少し肥えて見えた。学者らしい風采になつた」であり、その会話には、ジュネーヴで忠雄が再会した共通の恩師の消息も含まれていた。「新渡戸先生が人間は平等であると云ふ思想に到達するに至つた経路の話。同先生が今もなほ何故労働者が社会をdominateせねばならぬかの問題を理解することが出来ぬと云ふ話」などをしたという。

翌一月三日、水曜日は雪の中、午前十一時に忠雄と、太郎が招いたアメリカの社会事業に詳しい大堀という人が日本郵船の事務所に来たので、ダウン・タウンの「うまい方のRestaurant」に案内し、昼食をとりながら、大堀にアメリカの社会事業について説明をしてもらう。忠雄の要求に応えてのことであったようだ。レストランでは、先の市原という日本人も加わり、アメリカのよいところや、悪いところを話し合っている。夜は忠雄と太郎、それに市原の三人は、百十二丁目の井川という日本人の家に招待された。家族も加わっての晩餐であった。

一九二三（大正一二）年の矢内原忠雄の日記は、遺憾ながら全集未収録である。そこで「長崎日記」によってアメリカ時代の矢内原忠雄の動静をいま少し追ってみよう。忠雄は一月四日、木曜日から雪の降り積もる中をワシントンやボストンへの旅に出かけ、九日、火曜日にニューヨークに戻っている。この年、アメリカ東海岸の都市に大雪が降ったことを、「長崎日記」は書きとどめている。例えば一月四日には、「大雪が降った。一尺程も積つた。汽車の窓から美しい雪の景色を見た」とあり、五日には、「雪がまだ深かつた」とか、「みかんの大きいのを三つかつて雪の中をかゝえて帰つた。古本と果物は俺の生活には欠く可らざるものである」などといった記録を見出す。

九日の「長崎日記」には、「今日Bostonから帰つて来た矢内原君の話に、Concordは雪にうづまつて居る。三尺程も雪が積もつて居て、Emersonの墓までは行けなかつたと云ふ事であつた。

Emersonの家は、Carlyleの家と比してsimpleで清潔である、と矢内原君が話した」とある。どこに行っても矢内原忠雄は行動的である。「長崎日記」からすると、忠雄はボストンでは市北西のコンコード村まで出かけたようだ。アメリカの思想家で詩人のエマーソンは、この村で思索の日々を送ったのである。エマーソンは、ハーヴァード大学神学部の出身で、カントの平和主義の哲学を、アメリカに紹介した思想家・詩人である。ボストンの教会の牧師をしていたこともある。忠雄の崇拝する人物の一人であった。コンコードのエマーソンの旧家を訪ねた忠雄は、スコットランド旅行中見学したカーライルの家を思い出し、「Carlyleの家と比してsimpleで清潔である」との印象を長崎太郎に語ったというのだ。カーライルは、エマーソンに影響を与えたイギリスの思想家・歴史家であるが、忠雄にはエマーソンの方が身近に感じられたようだ。

翌一月十日の「長崎日記」には、「三時半頃矢内原君がOfficeへ来た。腹をいためたと云つて、弱つて居る様子であつた。今夜の夜汽車で発つと云ふ事でOfficeでさようなら（ママ）を云つた」とある。ちなみに忠雄は健康には気を配る方ではあったが、何せ若いことゆえ、無理な旅程を組みがちで、食事も急いで取ることが多く、とかく腹をこわしがちであった。後年の台湾視察旅行でも腹をこわし、それが以後の彼の健康に大きく響くこととなる。

矢内原忠雄のアメリカでの生活は、慌ただしかった。十一日にはアメリカ北部エリー湖とオンタリオ湖の間、カナダとの国境をなすナイアガラの滝を見学、ミシガン湖畔のシカゴでは、リンカーンの銅像に遭遇する。後年彼はその思い出を『余の尊敬する人物』（岩波新書、一九四〇・五）に、書いている。そこには「私はかなりの長い時間、一人でぶらぶら黒人街を歩いた後、相当疲れてミシガン湖畔の小公園に出た時、其処でひよつこりリンコーンの銅像に出会つたのです。彼は湖水の風に吹かれながら、質素な台の上につくねんと立つてゐました」と記して、「リンコーンよ、あなたは何をそんなに悲しんでゐますか。あなたの国の現状をですか。はた世界の現状をですか」と語りかけたという。

十五日には合衆国南西部のアリゾナ州のグランドキャニオン国立公園まで行く。グランドキャニオンは、コロラド川がコロラド高原を浸食して形成した大峡谷で、壮大な景観を成す。飛行機がまだ一般化していない時代である。移動は鉄道と自動車である。先にも書いたが第一次世界大戦後の円高は、日本人の懐をふくらませていた。日本郵船社員の長崎太郎は、その恩恵でウィリアム・ブレークをはじめとする多くの書籍や版画をニューヨークの古本屋で購入しており、東大助教授矢内原忠雄は、ヨーロッパやアメリカ各地を飛び回ることができたのである。ちなみに、長崎太郎がこの時代に集めた多くの書籍の一部は、現在京都市立芸術大学附属図書館に収蔵されている。『長崎文庫目録』（一九九一・三）が編集されており、概要を知ることが出来る。

矢内原忠雄はヨーロッパ時代と同様、好奇心を発揮してアメリカ各地の旅を楽しんでいた。十六日、火曜日には、カリフォルニア州のロサンゼルスに着き、市内を見学。旅は文字通りの強行軍であった。カリフォルニアでは、スタクトン市郊外の牛島農場を見学する。ここで彼は、後年著名な神学者となる桑田秀延に会う。桑田の後年のエッセイ「折々の人矢内原忠雄」（『朝日新聞』一九六七・七・一〇）に、そのことが書き留められている。そこで桑田は「私は男ぶ

りもよく、背たけもあって、貴公子然として、いかにもエリートの名にふさわしい姿をした矢内原助教授を、そのとき心にとどめた」と書く。この時二人は、ここで働く日本人労務者のために短い話をしたという。また、同州の州都サクラメントで共同墓地を視察した忠雄は、「欧州各国よりの移民の墓地は公園の如くに美しく整頓して居たに反し、邦人墓地は雑草蓬々（ほうほう）たる荒野の如き地区に漬物石の如き標石が置かれてあるを目撃して、長嘆之を久しくした」[3]との感想を懐いている。

忠雄には、続いてアメリカ西海岸の旅を楽しむ計画があったのかも知れない。留学期間は三月三日迄となっていた。が、一月十九日、サンフランシスコに到着したところで、彼は妻愛子の病の重いことを知らせる日本からの電報を受け取り、急遽帰国を決心する。

一九二三（大正一二）年一月二十三日、火曜日、矢内原忠雄はサンフランシスコ港を出港、日本の横浜に向かった。「愛子病む」の電報は、彼を打ちのめした。アメリカで、のうのうと旅の生活を続けていた我が身が反省されたのである。もろん彼には生涯一度の留学期間を用いて、多くの体験を積み、将来の研究と教育のため備えておきたいとの願いがあった。それゆえ留学期間を延長してまでアメリカに来て、各地をめぐり、見聞を広めていたのである。それは決して責められるものではあるまい。そうは言っても、二年以上も日本を留守にし、二人の幼子を妻の愛子ひとりに任せていたのが、心苦しかった。

船は太平洋を横断し、二月九日、横浜港に着く。十八日間の長く感じた船旅であった。義兄（妻愛子の姉喬子（のぶこ）の夫）藤井武が出迎えた。忠雄は義兄から愛子の病状が重いことを聞き、入院先の東京信濃町の慶應病院へ直行し、重病の彼女を見舞った。その一ヶ月半後の三月二十六日、忠雄の妻、矢内原愛子は世を去る。二児（伊作と光雄）を遺し、満二十四歳という若さの死であった。

子息の矢内原伊作によると、「愛子の病気は腎盂炎といわれていた。今日でも愛子の妹である私の叔母たちは「愛姉さんの病気は腎盂炎だったのでしょう」と言っている。そうだったのかもしれない。しかしどうやら腸結核だったらしい。忠雄の弟の啓太郎氏は「愛子の病気は腸結核だった」ということを忠雄の口からきいたことがあるそうである。当時結核は人に嫌われる難病であり、そのために表面上は腎盂炎ということにしてあったものと思われる」[4]というのである。そういえば愛子の実家、金沢の西永家では、長男公一、それに愛子の弟、西永泰が結核で死亡。また愛子の姉で、藤井武に嫁いだ西永喬子（のぶこ）も、前章（第六章四）でふれたように、肺結核で半年間の病床生活後亡くなっていた。結核は慢性伝染病である。今は各種の抗結核薬によって治癒するようになったが、当時は不治の病であった。西永家はそれにとりつかれていたかのようである。

妻愛子を亡くして、忠雄は自分がいかに彼女を愛していたかを知る。留学中は手紙の来ないのを歎き、「彼女の怠慢に対して腹が立つて仕様がなかつた。僕が愛子を思ふ程愛子が僕を思つて居ないことは事実だ。僕の手紙やハガキを受取り乍らその返事も出してくれないのだ。僕も愛子流に三週間も一ヶ月も無沙汰してやらうかと思ふ」（一九一一・一〇・一三）と日記に書き、ドイツ女性Hanna Kriesmanの優しさに惹かれていた自分を思い、反省することしきりであった。愛子の死による心の痛みは、以後の忠雄に終生つきまとうこととなる。

二十四歳の若さで死んだ妻への哀惜の想いは、尽きなかった。彼は妻を置いてひとり外遊生活に行き、留守中の妻の立場を十分理解できなかったことを神に懺悔した。それは簡単に忘れ去ることのできるものではなかった。後年の「第二イザヤ書講義」[5]には、以下のような文面を見出すことができる。

今から二十年も前に、私は或る問題を非常に苦しみ悩んだ事がある。そして浅間山麓の離山（はなれやま）を、泣きながら何度上つたり下りたりしたか解らない。自分の涙で以て離山が解けてしまふかと思ふぐらゐであつた。さうしてゐる中に突然「なぐさめよ汝らわが民をなぐさめよ、その服役の期すでに終り、その咎既に赦されたり」といふ第二イザヤの始めの言葉が私の心にささやかれた。どうして赦されたのか、どうして終つたのか解らない。けれどもそれは「どうして」といふことを問ひ返すことのできない圧倒的な天からの慰めの言葉として、私を占領してしまつた。それで私は涙を拭って山から降りたことがある。それ以来イザヤ書第四十章一節二節は私の言葉となつたのであつて、今迄何十回之によつて助けられて来たか解らない。神の赦しを得る、神からの解放を得ることは、自分の小さい経験でも解る様に、全く神の憐み、神の側より出づる恩恵である。

これは一九二三（大正一二）年の愛子の死の際のこととしてよい。離山は長野県軽井沢町のほぼ中央にある、なだらかなかたちの山である。イザヤ書第四十章一節二節は、忠雄の暗記していた文語訳の『舊新約聖書』では、次のように翻訳されている。――「なんぢらの神いひたまはく、なぐさめよ汝等わが民をなぐさめよ　懇ろにヱルサレムに語り之によばはり告よ、その服役の期すでに終り、その咎すでに赦されたり、そのもろもろの罪によりてヱホバの手よりうけしところは倍したりと」。

右の文章に見られる「或る問題」とは、妻の死によって引き起こされた激しい自責の念である。それは、むろん直接には妻の立場を十分考慮することなく、手紙の来ないのに腹を立てたり、若く優しいハナというドイツ人女性に、心惹かれたことにあったろう。が、矢内原伊作の言うように、「そんなことよりも遙かに痛烈深刻な罪についての自責であり、涙である」[6]としたい。自己の行動をも含めた人間のどうしようもない深い罪に、彼は泣いたのである。彼は妻の死という厳粛な事実を受け入れるのが、怖かった。忠雄は愛子の亡骸に取りすがって泣きに泣いたという。

二人の夫婦生活は、わずか六年ほどに過ぎなかった。しかも、忠雄の在外研究のため、二年三ヶ月ほどは別居生活であった。忠雄は愛子を深く愛していたことを、その死を前にして知らされたのである。彼はこのむごい現実を、なぜ与え給うたのかと神に問わずにはいられなかった。

矢内原愛子の葬儀・告別式は、一九二三（大正一二）年二月二十八日、午後三時、九段坂上教会で行われた。義兄藤井武が司式をし、藤井と舞出長五郎が告別の辞を読んだ。舞出は無神論者であったが、生涯忠雄を理解し、この時も教会の葬儀で弔辞を読み上げている。

愛子の亡骸は、多磨墓地（多磨霊園）に葬られた。墓石は横長で、「清き岸べに／矢内原家」と刻まれた清楚なものである。

二　植民政策研究と再婚

時は留まらず、無情にも過ぎ行く。愛子は伊作（五歳）と光雄（三歳）の二人の子を残して逝った。忠雄は当面二人の子を金沢の西永家に託し、大学の仕事に就くことになる。一九二三（大正一二）年度からは、経済学部および法学部での植民政策の授業に加えて、東京女子大学での経済学講座の授業も予定されていた。忠雄の東京での住まいは、愛子が生前夫の帰朝後に住むために用意した東京府荏原郡大井町四七〇二の家に定めた。たまたま弟の啓太郎が六高を終え、東大医学部に入学したので、同居することになる。妹の悦子が幼稚園の仕事をやめてしばらく家事を手伝った。が、彼女は七月に医師田原茂と結婚、大井町の家を離れたので、その後はウメさんという若い女性（忠雄の書簡には、「梅子」と出て来る）が以後約一年間、忠雄家の家事を担当した。

この困難な時期、彼は帝大聖書研究会（のちの東大聖書研究会）の創設に携わっている。試練の中でも、「何か福音のために積極的な態度をとりたいといふ気持が私の衷に動いて居た」と彼は言い、その一つとして、「私が留学から帰つた翌年から毎週一回、山上集会所の一室を借りて、「帝大聖書研究会」を始めたのである」[7]とその創設由来を語る。が、「留学から帰つた翌年から」というのは忠雄の記憶違いで、「翌々年から」が正しい。

研究会の出発と回数に関しては、右の文章を収録した『全集』の編集者注には、「大正十四年開始、月一回が正しいようである」とある。また、近年刊行された鴨下重彦他編『矢内原忠雄』（東京大学出版会、二〇一一・一二）に収められた川中子義勝「「宗教改革論」と東大聖書研究会」が、発足当時の帝大聖書研究会に触れていて参考になるが、ここでも一九二五（大正一四）年説をとる。創設から東大教授辞職によって会を閉じるに至るまでの歩みは、右の川中子の論に譲る。なお、一九二七（昭和二）年に東大経済学部に入学した大塚久雄に「東大聖書研究会のこと」[8]の一文がある。そこで大塚は忠雄の指導ぶりにふれ、「この聖書研究会に対して先生が示された熱心はひじょうなもので、先生が欠席されたことを、どうしても思いだせないほどである。毎月の例会がおわるのはいつも十時近く、つまり山上御殿の灯がきえることになる時間」と記す。戦後復活した東大聖書研究会については、石館守三・原島圭二ほか三十二名による回想文、東大聖書研究会編『信仰と生活の中から』（東京大学出版会、一九五八・一二）が詳しい。この本を読むと、忠雄の蒔いた信仰の種が、いかに大きく育ったかが分かる。

さて、忠雄は悲しみを紛らわすかのように、授業と研究に没頭した。授業は「植民政策」と題されたものである。当時学生として大内兵衛の「財政学」と忠雄の「植民政策」を聴講した美作太郎は、後年『戦前戦中を歩む　編集者として』（日本評論社、一九八五・一二）という回想記の中で、次のように書く。

> 大内兵衛教授の「財政学」と、矢内原教授の「植民政策」の二つから、私は実に多くのものを学びとることができた。「植民政策」の講義は、ローザ・ルクセンブルクの資本蓄積論を中心とする経済原論と、レーニンの「帝国主義論」への導きの指標となった。

若き矢内原忠雄は熱心に研究し、講義に当たった。テーマの植民政策とは、日本はどのようにして植民地を統治してゆくかの研究と言ったらよかろうか。それは恩師新渡戸稲造の講義を引き継いだもので、学問的研究の未だ本格的鍬入れのない分野であった。忠雄はそれを学的に確立しようとした。彼は在外研究中、イギリスの植民地に等しいアイルランドに行き、イギリス領の北アイルランドとの差を見ていた。そうした体験が研究の原動力となっていく。

妻愛子の死は、やりきれないものがあったが、彼に厖大な研究上のエネルギーを与えた。二年三ヶ月ほどの外国滞在は、日本の生活に戻るのに若干とまどうこともあったものの、彼は亡妻のおもかげを振り払うようにして机に向かった。哀しみを研究のエネルギーに転化させ、精進する。書くことはいくらでもあった。彼はよく勉強し、それを論文にして、次年度以降次々に発表するようになる。なお、この年八月三十日付で、忠雄は東京帝国大学経済学部教授に昇進している。彼は未だ三十歳、研究者としての前途は洋々としていた。帰国後発表した最初の論文は、「シオン運動（ユダヤ民族郷土建設運動）に就て」（『経済学論集』旧第二巻第二号、一九二三・一〇・一五）であった。掲載誌の『経済学論集』は、東京帝国大学経済学部の機関誌である。この論文は、のち『植民政策の新基調』（弘文堂、一九二七・二）に収録された。

「シオン運動（ユダヤ民族郷土建設運動）に就て」は、忠雄の処女論文とも言われる。[9] 本論文には、前年のパレスチナ旅行が深く関わる。矢内原忠雄に「パレスチナ旅行記」という紀行文があることは、前章に記した。その後半部は「近年ロシヤ、ルーマニヤ、ポーランド等より移住し来りたる猶太人」に焦点を合わせていた。忠雄は帰国後最初の論文を、「パレスチナ旅行記」で扱った移住ユダヤ人問題に関連させて論じたのである。「シオン運動（ユダヤ民族郷土建設運動）に就て」は、現在『矢内原忠雄全集』第一巻に収録されている。四百字詰原稿用紙にして百枚余、一　シオン運動の背景　二　シオン運動の主張並に批評　三　シオン運動の植民的方面　四　シオン運動の政治的方面　五　シオン運動の文化的方面の五章を立てての本格的論文である。発表後百年近く経っても、依然、ユダヤ民族問題の参考になる論文だ。以下にこの処女論文を、やや詳しく見ていきたい。巻頭の「一　シオン運動の背景」は、次のように書き出される。

シオン（Zion, Sion）とはエルサレムの丘の一つにして、ダビデ王がエブス人より取りたる要害であつた。後転じてエルサレム全市を指すにも用ひられた。エルサレムはパレスチナの都で、ユダヤ国民生活の中心であつた。ユダヤ国の滅亡、ユダヤ国民の四散の後にも、エルサレムは少くとも彼等の宗教生活の中心であつた。ユダヤ人の会堂では全世界何地に於ても、エルサレムの方向に面して礼拝を行ふ。再びエルサレムの神殿に於て神を拝し得る日までは、モーゼ律に定められたる犠牲による祭式をも彼等は敢て為さないのである。彼等は今なほパレスチナを以てエレツ・イスラエル（Erez Israel）、イスラエルの地と呼び、パレスチナ以外の地を総称してディアスポラ（Diaspora）、離散客寓の地と呼ぶ。客寓の地よりその郷土に帰還せんとするは彼等の歴史的欲求である。嘗てユダヤ国家の多数が

バビロンに捕へ行かれし時、彼等の詩人は歌つて言つた。「われらバビロンの河のほとりにすわり、シオンを思ひ出でて涙をながしぬ。われらそのあたりの柳にわが琴をかけたり、そはわれらを虜にせしものわれらに歌を求めたり、われらを苦しむる者われらにおのれを歓ばせんとてシオンのうた一つうたへといへり、われら外邦にありていかでエホバの歌をうたはんや、エルサレムよもし我れ汝を忘れなば、わが右の手にその巧みを忘れしめ給へ、もしわれ汝を思ひ出でず、もしわれエルサレムをわがすべての歓喜の極となさずば、わが舌をわが顎（がく）につかしめ給へ」（詩篇一三七篇）と。美しきシオンの都！　パレスチナの山河！　何時の日か我等が郷土に帰り、われらを政治的社会的に虜にせし者より解き放されて、真実に「自己の生活」を営むを得んか。これ時代を通じてのユダヤ民族の憧れであつた。而してシオン運動（Zionism, Zionismus, Sionisme）はその近代的発現であり、パレスチナに於けるユダヤ民族郷土建設の具体的活動である。

矢内原忠雄は処女論文を、シオン運動をもってはじめる。彼はイスラエル史におけるシオン運動がいかなるものかを、分かりやすく、格調高く説明する。神戸一中時代から日本語表現に抜群の才を示していた彼の文章表現技術が、ここに遺憾なく発揮される。彼は読める文章の書ける学者であった。続けて彼は「シオン運動を了解せん為めには、その背景としてディアスポラに於けるユダヤ人寄寓の事実、即ちユダヤ民族の特殊的存在を研究せねばならない」と言う。再度言うが、忠雄の文章は的確で分かりやすい。今日の聖書学者の研究論文や翻訳ものに見られない文章表現の巧みさがある。素人の読者をも引きつける力に満ちている。

彼はユダヤ人の離散客寓の歴史を省み、シオン運動の背景に言及する。「紀元七〇年にエルサレムがローマ軍によりて破壊せられてユダヤ王国が全く滅亡し、一三七年ハドリアン帝がユダヤ人のパレスチナ居住を禁じたる以来、ユダヤ人は世界に四散したるが、其大部分はAschkenasimおよびSephardimの二派に分れ、前者はドイツ、ポーランド系にして北欧諸国（ドイツ、ポーランド、ロシア、ガリシヤ、ルーマニア等）に客寓し、後者はスペイン、ポルトガル系にして一四九二年スペインより追放せられし後は、トルコ、イタリー、オランダ、其他英仏等西欧及南欧諸国に転寓した。而して彼等の各地に於ける運命は一言にして言へば寄寓者の運命にして、往昔彼等の先祖がエジプトの国ゴセンの地に於て嘗めたる運命は亦彼等がDiasporaに於て繰返したる処であつた」と。Diasporaとは、パレスチナから他の国々に離散したユダヤ人をも言う。彼らはローマ帝政下やスペインの十五世紀末のユダヤ人迫害を経ている。矢内原忠雄は、イスラエル史を念頭に、現代のシオン運動に至った背景にしっかりと眼を注ぐ。そこには師内村鑑三が早く「聖書の預言とパレスチナの恢復」（『聖書之研究』第二一六号、一九一八・七、この論は、内村鑑三述、藤井武記となっている）で述べたことが、どこかに影を宿しているように思われる。

前年のパレスチナ旅行でユダヤ人問題に目覚めた矢内原忠雄は、帰国後その方面の文献をも漁り、ここに彼自身の問題意識と重ねる形で、「シオン運動（ユダヤ民族郷土建設運動）に就て」を書いたのである。彼はパレスチナ旅行で、ロシアやルーマニア、ポーランドな

どから移住してきたユダヤ人の青年が、植民地村で荒地を緑の野に変えているのを見、深い感動を覚える。彼のシオン運動への関心の始原は、パレスチナ旅行にあった。否、シオン運動ばかりではない。彼の植民政策論の根底を支えるものが、ここにあったといってもよい。

矢内原忠雄のヨーロッパ留学の成果は、ヨーロッパの大学における講義の聴講にあったのではない。各地をめぐり、美術館や博物館に入り、音楽会に出、旅行をするという中にあったことが、改めて想起される。本論は近世ユダヤ人問題、――シオン運動の背景を現地調査と文献調査をもって的確に示す。彼はロシアをはじめとする東欧諸国（ルーマニア、ポーランドなど）のユダヤ人迫害史に眼を留め、迫害の凄まじさを、数字をあげて説明する。さらにドイツ・イギリスのユダヤ人迫害に及ぶ。ロシアの迫害を逃れたユダヤ人が大量に移住したアメリカでさえ、ユダヤ人の増加と共に「好ましからざる移民」として取締りが厳重になる。ユダヤ人は常に一定の地域に落ちつくことが許されなかったのである。それが「ユダヤ人の最大悲劇」であったと忠雄は言う。そして「ユダヤ人の民族的郷土の恢復がシオン運動の目的である」として、「二　シオン運動の主張並に批評」の章に入る。

矢内原忠雄は「シオン運動は十九世紀後半東欧諸国に於けるユダヤ人迫害を直接の刺戟として起りたるユダヤ民族郷土建設の運動である」と言う。彼は国が滅んで各地に流浪の運命に置かれたユダヤ人が、安住の地を求める情は、ディアスポラの歴史と共にあるとする。ユダヤ人迫害は南欧西欧をめぐって東欧に及ぶ。ユダヤ人は迫害を避けるために、受け入れてくれるなら、何処へでも移った。彼らの多くは、経済的に豊かなアメリカ合衆国に渡った。その中のある者は、パレスチナに移住し、ロスチャイルドやヒルシュなどヨーロッパの富豪となったユダヤ人の援助で植民地を創設する。イギリスやフランスなど先進資本主義国には、有力なユダヤ人資本家がいたのである。「シオン運動には政治的文化的経済的の三方面がある」と矢内原忠雄は言い、一つ一つ説明を加える。

現実のパレスチナ植民地を見てきた彼は、文献で得た知識をも挙げながら論を展開する。彼は第一のシオン主義運動として、ピンスカーらの活躍をあげる。「政治的シオン運動の魁（さきがけ）として挙ぐるべきはロシア系のユダヤ人ピンスカー（Leo Pinsker, 1821-1991）である」と彼はいう。ピンスカーは一八八二年『自助的解放』という本を出し、ユダヤ人の民族的自覚に訴え、生活を安らかに営むことのできる地域を得ることを主張した。が、ピンスカーの書は、東方ユダヤ人を動かしたものの、西欧には及ばなかった。

政治的シオン運動を実際に組織し、東欧・西欧のユダヤ人をこの旗の下に統一したのは、オーストリア系のユダヤ人ヘルツル（Theodor Herzl, 1860-1904）であると忠雄は言う。ヘルツルは、ユダヤ系の砲兵大尉アルフレッド・ドレフェスが冤罪を受けた事件に際し、自由の国フランスに於てもユダヤ人問題が政治的に解決されていないことや、文明国の同化主義に絶望し、『猶太（ユダヤ）国』という本を著し、ユダヤ人問題は、国際法的に保証される地域の存在の必要を主張した。ヘルツルはその実現のため、シオン同盟を組織し、第一回シオン主義者大会を一八九七年、スイスのバーゼルで開催、バーゼル綱領を採択した。第一次世界大戦はシオン運動に利し、一九一七年十一月二日、イギリスはバルフォーア宣言でユダヤ人のパレス

チナにおけるユダヤ人の民族的郷土建設の要求を是認した。そして一九二四年八月、ローザンヌ条約の批准によってイギリス委託統治地としてのパレスチナの国際法的地位が確立し、シオン運動は認められ、「今は実際的活動によりて如何に其の実現を計るべきやが問題たるのみである」とまとめられる。

第二の文化的シオン主義の代表は、アハド・ハアム（Achad Ha'am）であると忠雄は言う。アハド・ハアムはヘルツルの『猶太国』の思想に反対する。それは国際法団体としてのユダヤ国は、外交と軍事で他国の圧迫に対抗して生存することができない、またパレスチナに収容する人口数は、全ユダヤ人の一部に過ぎないので政治的シオン主義は無理だというのである。アハド・ハアムは、シオン運動は精神的なものであるとした。矢内原忠雄はこうしたシオン運動の二つの主張を紹介した上で、「文化的シオン主義と政治的シオン主義とは互に提携補充すべきもの」との考えを示す。そして「政治的シオン主義と文化的シオン主義とは相混和してシオン主義の内容を為せるものとなつた」とする。

シオン運動は「迫害より逃避する消極的動因によりて始められた」と矢内原忠雄は言い、続いて「併乍（しかしながら）らその活動は今や甚だ積極的建設的なる内容を有する。ユダヤ文化の復興発揚、並びに在来の資本主義的経済組織と異る原則に立つ新社会の創設、之等の基礎に立つ民族的郷土の建設、この理想この目的の為めに彼等は起つて居る」と書き、それは「正に一のユートピア」と言う。こうした言説の背景には、再び記すが、前年のパレスチナ旅行があったことは言うまでもない。本論は、フィールドワークの成果でもあるのだ。

矢内原忠雄の在外研究は、旅と図書館・美術館通いにあった。それが帰国後の研究生活に、その著述に反映して行く。処女論文「シオン運動（ユダヤ民族郷土建設運動）に就て」は、前年のパレスチナ旅行抜きには考えられないのである。また、この処女論文に期せずして反映された矢内原忠雄の学問姿勢が、以後も机上の文献研究に終わらず、徹底した現地研究を伴うものであったことを見逃すことができない。また、記述は常に客観的で、しかも批判的にあるべきことを意識する。後年の『植民及植民政策』（有斐閣、一九二六・六）や『帝国主義下の台湾』（岩波書店、一九二九・一〇）など、その典型の業績である。

矢内原忠雄はシオン運動に理解を示しながら、そこに反対的批評があることも書き添え、論破を試みる。第一は、ユダヤ人中の同化主義者の主張である。彼らは各国において、その民族と同化し、差別待遇の撤廃を得るのがユダヤ人問題の解決の道であるとする。が、そのような人は、おおむね社会的地位を得ており、シオン運動がユダヤ人排斥熱を刺戟し、自己の地位を不安にすると考えている。が、ユダヤ人で同化した者は少なく、同化論は机上の空論であると忠雄は言う。

シオン運動に対する第二の反対は、ユダヤ人をして一つの宗教団体に過ぎないとする考えである。「その使命は精神的にして政治的にあらず」というのである。それに対して忠雄は、ブルンナー（Brunner, C）などのシオン運動否定論を排し、「パレスチナの地がユダヤ人の宗教に重要なる密接の関係を占むるを思へば彼の見解は甚だ不透明である」とする。第三の反対は、社会主義の立場からのシオン運動の批判である。カウツキー（Kautsky, K）の『種族とユダヤ主義』がそれに当たる。カウツキーは、ユダヤ人問題は無産階

級の革命に、虐げられているユダヤ人が参加することで解決するという。これに対しては、無産階級のユダヤ人が解放運動に参与して階級的解放を得ても種族的・民族的対立関係が消えるわけではないと忠雄は言う。いずれも説得力ある反論で、シオン運動への理解ある考えだ。「三　シオン運動の植民的方面」は、現地を見た者にしてはじめて書ける内容だ。次のような書き出しにはじまる。

パレスチナの自然的及び社会的条件は必ずしも植民に有利なる状況を呈して居らぬ。ユダヤ人植民の開始当時に於ては殊に左様であつた。「乳と蜜の流るゝ」と歌はれし国土も顧みられざること二千年にして今は磽瘠沼沢多き地に退歩し、シャロンの野、下部ガリラヤの平野も非常なる資本と労力とを加ふるにあらざれば穀倉の実を恢復することは出来ず、繁茂せしタボルの山今は禿頭と化し、葡萄の壇に飾られしユダヤの山地今はその土洗ひ流されて石肌露はである。その沼沢地はマラリヤの巣窟である。かくの如き土地を農業的に恢復するは決して容易の業ではない。又国内、鉄を産せず石炭を産せず、石油も噴出して居らない。

矢内原忠雄は前年のパレスチナ旅行を通し、その地の現状をしっかりと把握していた。パレスチナは今や荒れ果てている。かつての豊かな産地は荒廃し、今や石肌が露わである。そして沼沢地は、マラリヤの巣窟と化している。しかもこの地は、鉄や石炭や石油を産出しない。原料品の産出もなく、市場もない。運輸交通の便にも恵まれない。従って商工業の興る条件がない。彼は「パレスチナの経済的誘引は殆ど零に等しい」と延べ、カウツキーがシオン運動の植民事業成功の見込みを否定したのも、無理からぬこととも言う。

が、経済的環境が人間事業の成否を決める唯一の事情であるならば、ユダヤ人のパレスチナ植民など一の空想に過ぎないとし、ユダヤ人のパレスチナ植民の話に及ぶ。その経緯を彼は農業植民に見ようとする。前年のパレスチナ旅行で、彼はロシアやルーマニアやポーランドから移住してきたユダヤ人の青年が、荒れ地を緑の野に変えているのを見てきた。それが論を根底で支えているのである。ここでは資料をもってパレスチナにおけるユダヤ人の農業植民を四期に分けて説明する。矢内原忠雄はこの章を、実に根気強く、調べ抜いて書いている。

さて、次の章「四　シオン運動の政治的方面」は、列強の保証の下にパレスチナにユダヤ文化中心の民族的自主社会の建設が、第一次世界大戦の機会に生じたことに入る。一九一七（大正六）年二月七日、イギリス政府とシオン同盟代表団との間に結ばれた取り決めや、その後のバルフォーア宣言などに触れ、パレスチナの統治がイギリスに委託されたことを記す。矢内原忠雄はパレスチナ居住民の八割以上はアラビア（アラブ）人であるとし、そのシオン運動反対にも目を向ける。彼は「ユダヤ人はこゝに於てもディアスポラに於けると同様依然少数者たる地位を繰り返すのみ」と言い、アラビア人のシオン運動反対の理由をも事細かに共感も交えて書き上げる。

その上で「ユダヤ民族のなげきはその民族的浮浪者たるにある。彼等も他の民族の如く自己の足を立つべき地を地球上に求むるものにして、其目的地は歴史的に必然にパレスチナに決定せられたのである。ユダヤ民族現実の必要がシオン運動の動因であつた。而して

彼等は資本と労働とを自らもたらし、その活動力によりてパレスチナを経済的に恢復しつゝある」と言う。さらに「資本と労働とが人口稀薄なる地域に投ぜられ、人類の努力を以て土地の自然的条件を改良し、地球表面に荒野なきに至らしむるは植民活動の終局理想である」とも言う。

「五　シオン運動の文化的方面」の章は、「シオン運動はユダヤ文化の復興運動である」にはじまる。ユダヤ人は二千年来世界各地に散り、母語を忘れた。それがパレスチナに住むユダヤ人教育は、今や全部ヘブル語となったことを忠雄は指摘し、「ヘブル語の復興はユダヤ文化の復興を促進、各国よりパレスチナに移入するユダヤ人の為めに共通なる日用語を供給したるものとなつた」とする。さらにパレスチナの教育の現状にふれ、ヘブライ大学の創設の意味にも及ぶ。最後に彼は、「私がこゝにシオン運動の過去と現在、理想と事業について記述せる処によりて、ユダヤ民族郷土建設運動の性質とその世界歴史上の意義を知るに足らば幸である」と書く。

以上にやや詳しく本論を紹介した。なぜなら、この「シオン運動（ユダヤ民族郷土建設運動）に就て」は、矢内原忠雄の処女論文であるばかりでなく、現在から見ても先見的ユダヤ人国家論、ユダヤ開拓植民論と見なされるからだ。この論文は、一九四八（昭和二三）年五月のイスラエル国誕生二十五年前の一九二三（大正一二）年十月十五日発行の『経済学論集』に発表されたものである。当時の反応は、矢内原忠雄の『私の歩んできた道』の「処女論文―シオン運動論」と小見出しを立てたところでは、「自分ではおもしろいと思って書いたけれども、これが『経済学論集』に載ったかといって、ずいぶん、人がびっくりした」[10]という。矢内原は留学してきたのに経済学や植民政策の勉強をしていないと長老の教授たちが心配したのである。その心配とはうらはらに、本論は先見性に満ちたすぐれたユダヤ植民論であった。イスラエル国建設二十五年前の東大経済学部の長老たちには、理解できなかったことも何となくわかる。が、矢内原忠雄の担当科目は、植民政策である。担当講座の内容とも、決して関係のない論文ではなかったのである。むしろ将来に向けての課題性のある論文だった。植民とは何かの問いかけのある優れた論だ。彼がこの処女論文を専門領域での最初の本『植民及植民政策』（有斐閣、一九二六・六）に収録しなかったのは、そうした周囲の眼を慮ってのことかも知れない。

処女論文「シオン運動（ユダヤ民族郷土建設運動）に就て」は、矢内原忠雄の以後書かれる植民政策論の基本的骨格につながる特色があった。第一は先見性と批判精神である。彼には先を見通す優れた能力が備わっていた。対象を批判的に見る眼があった。それがはやくも処女論文に現れていたのである。が、当時の東京帝国大学経済学部の長老教授連には、それがわからなかったので、心配したり、勉強が足りないと思ったりしたという。第二は直感と実証という相対立する方法が、バランスよく共存しているところにある。彼の植民政策に関する諸論考は、まずは直感から出発している。ここに何かの問題があるとの認識が先行する。その直感を基に、徹底した現地調査と文献調査で対象を相対化し、実証していくのである。第三は論述を支える明快な文章表現である。その基礎は早く神戸一中時代に養われたもので、本論の第一章で詳しく述べたところである。以後書かれる彼の多くの植民政策論には、いずれもこの三点の特色が反映している。

東京帝国大学経済学部での矢内原忠雄の担当は、植民政策であった。彼はその講義ノートに精魂を傾ける。彼は講義のない日も研究室に閉じこもり、講義ノートの作成に励む。そしてノートを『植民政策講義案』と題して、一～三の三分冊として刊行（有斐閣、一九二四・一）している。それがやがて右に挙げた彼の専門領域での最初の本、『植民及植民政策』となるのをはじめ、『植民政策の新基調』（弘文堂、一九二七・二）、『人口問題』（岩波書店、一九二八・二）に結実する。この頃の矢内原忠雄の奮闘を同僚だった大内兵衛は、以下のように回想する。[11]

彼は毎日朝から晩まで研究室に立てこもって熱心に講義案を作ったばかりでなく、実に多くの専門の論文を次々に発表した。彼の『植民及植民政策』『植民問題の新基調』『人口問題』はこの数年間の彼の努力を記念するものであるが、いずれも格調の高い名著である。彼はこうして彼自身のシステムをたてたが、一つのシステムの正しさは事実によってのみ実証せられるというのが彼の説であった。そこで彼は、昭和のはじめから十年間にわたって日本の植民地各地の行政の研究を企て自らそこに出かけて行くことにし、それぞれの地であらゆる人と資料とについて事実を学んだ。彼の著名な四部作1『帝国主義下の台湾』、2『満州問題』、3『南洋群島の研究』、4『帝国主義下の印度』はこうしてできたものである。このいずれもが形の上で学問的な大作であるばかりではない。実質において日本植民政策のほんとに実証的な批判であった。それがいかに科学的なそれであり、それがいかに当局を震撼させたかについていろいろの語り草もあるけれども、これらの本の大部分はそれぞれの植民地への移入を厳禁されたこと、また、これらの本が中国やロシアでほんやくされたこと、その3のごときは戦後進駐軍のスタッフの唯一の参考書となったことなどは、この本の価値を裏から評価したといっていい。

また、経済学者の中村勝己は、この時期の矢内原忠雄の厖大な執筆量にふれて、「（これらの著作が）夫人が召された、人生のもっともグルーミィーな時期をも含めたほぼ三年間に書き上げられているのであって、その精進のすさまじさはまさしく肌に粟を生ずるばかり」[12]と評する。

妻の死の悲しみを乗り越えるために、矢内原忠雄は授業と研究に没頭した。そうした彼に、再婚の話がもちあがる。彼は未だ三十歳、二人の子をかかえて難渋していた。妻の死後、幼い伊作と光雄は、引き続き妻の里、金沢の西永家に託していたものの、そういつまでも西永家の好意に甘んじることは出来なかった。彼は二人の子を、自身の手許で育てることを決意する。時は一九二三（大正一二）年の夏であった。八月の夏休みを最終期限とし、忠雄は二人の子を東京の自宅に引き取ることにした。そこで九月一日、二人の子を愛子の叔母原幾世とともに、金沢から連れ帰ることにし、金沢を発ったものの、昼頃、列車がストップし、動かない。相模湾を震源地とする関東大震災に遭遇したのである。

地震はマグニチュード七・九～八・二という大きなものであった。忠雄たち一行は、仕方なく金沢に引き返した。翌日になって列車が東京まで行けると知るや、忠雄は単身東京に向かい、九月三日

の夜新宿に到着した。東京の惨状は予想以上であった。地震に続く火事が被害を大きくしたのである。東京府荏原郡大井町四七〇二の家は、火災は免れたものの、半壊の状況で住むのは無理だった。忠雄は同じ大井町五一一一番地の家を借りて引っ越す。そして、十月には金沢から子どもたちを連れ帰っている。原幾世がしばらく同居し、子らの面倒を見た。なお、この月から忠雄は東京帝大農学部での植民政策の授業も担当することになる。

こうした状況の忠雄に、再婚の話が起こったのである。相手は内村鑑三門下の宇佐美六郎の妻信子の妹、堀恵子である。宇佐美は一九一〇（明治四三）年九月、一高第一部甲類の無試験検定入学組で、忠雄の同期である。一高基督教青年会や柏会や読書会を通しても、親しい友人の一人であった。宇佐美は当時大阪地方裁判所の判事で、兵庫県の芦屋に住んでいた。ちなみに宇佐美六郎は、後年極東国際軍事裁判で、A級戦犯で終身刑となった平沼騏一郎の弁護人を担当したことでも知られる。

宇佐見六郎は当時、忠雄が妻を亡くし、二人の幼児を抱えて苦労しているのを知っていた。一方、恵子は未だ独身であった。双方をよく知った友人の仲立があって、困難と思われた忠雄の再婚が曲折はあったものの実現することになる。忠雄は堀恵子と以前に一度会ったことがあった。それが幸いした。一九二〇（大正九）年の忠雄留学の折、神戸で黒崎幸吉夫婦らが、ささやかな送別会を開いてくれた時に、何と堀恵子は同席していたのである。忠雄の一九二〇年十月十五日の日記に、「黒崎兄宅泊、黒崎夫婦、江原、宇佐美各夫婦、斎藤夫婦（洲司）、堀夫人、恵子、和一の諸氏にてうつくしき送別会」とある。ここに名が出て来る「恵子」が、再婚候補の堀恵子なのである。

堀恵子は実業家（宝石時計店堀米商店経営）堀米吉の四女であった。一八九八（明治三一）年九月十八日、大阪心斎橋北詰の生まれである。忠雄とは五歳の年齢差があった。恵子は兵庫県御影師範附属小学校を経て、大阪梅田高等女学校（現、大阪府立大手前高校）を卒業していた。当時の女性の学歴としては申し分なかった。父堀米吉は街路大時計の作成者として知られるが、キリスト同信会の熱心な会員でもあった。キリスト同信会とは、『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、一九八八・二）の記述（執筆・藤尾正人）によると、一八八八（明治二一）年にH・G・ブランドが単身来日して伝道をはじめたプロテスタント宗派である。ブランドはプリマス・ブレズレン（Plymouth Brethren）の平信徒伝道を尊び、超教派的伝道を行った。教会組織や会堂を持たず、聖職制度もなく、すべての信徒を兄弟と呼んだ。第五章ですでに記したが、黒崎幸吉や矢内原忠雄に洗礼を施した牧師松本勇治もここに所属した。

堀恵子は、当時兵庫県武庫郡住吉村畔倉に父母と共に住んでいた。父の影響もあって、キリスト同信会の信者で、芦屋会集会のメンバーであった。彼女はそれまであまたあった縁談話を、一切断っていたという。が、義兄宇佐美六郎から妻に先立たれた矢内原忠雄の許に行く気はないかと問われると、「神のみ心と思うから行きます」と答えたと、忠雄の子息矢内原伊作は『矢内原忠雄伝』[13]に書いている。かつて一度会ったことが、この場合役立った。結婚に至るまでの忠雄の心境は、幸い堀恵子宛書簡のいくつかが、『矢内原忠雄全集』第二十九巻に収録されているので想定がつく。

愛子の死後一年後あたりから二人の仲は、急接近する。三年半前

の忠雄の欧米行きの「うつくしき送別会」で会った際、恵子には忠雄が、多分に輝いて見えたことだろう。一方、忠雄は恵子の育ちのよさや知的な美しさを初対面で印象にとどめていた。それが結婚を前提とした交際の中で、愛を確認するまでになる。忠雄の堀恵子宛便りの一つを紹介しよう。

恵子さん二十一日の御手紙今日届きました。チャン／＼とあなたのお便りいただけるので非常にうれしいのです。

あなた今頃はもうスヤスヤ御やすみでせう。鳩の夢でも御覧ですかしら。私あの御夢の御話を忘れることが出来ません。度々思ひかへして居ります。今はねもう午前一時に近いのです。私今まで勉強して居りました。近処の松の山で風がゴーッとなつて居り、二階の雨戸もガタガタ言つて居ますがそれが一層しづかさを増します。私こんな静かな時に一人居るのが一番うれしいのです。皆眠つてしまひました。机の上にはランプが暖かさうに輝いて居ます。愛子の写真があります。私をジッと見て慰めてくれて居ります。恵子さんの御写真ありませんけれども御顔はちやんとわかつて居ります。私一人で居る時一番愛するものの愛を感じて賑やかなのです。（一九二四・二・二三付）

これはもう完全なラブレターである。矢内原忠雄には、きびしい時代の中での弾圧を耐えた人、謹厳実直の学者のイメージが常につきまとう。が、それは後半生の彼の姿であって、若き日の矢内原忠雄とはだいぶ異なる。若き日の彼は、学校の成績が抜群であったばかりか、冗談を好み、時におどけた態度をとって、人を笑わせることの好きな好青年であった。彼は何事にも目立つ態度をとりがちな人であった。女性との関わりにおいても、当時の一般男性以上にませており、先を行っていた。十六歳での初恋の相手増井艶子と彼の間に、キスや抱擁があったことは、すでに第二章でふれた。第一の妻西永愛子は、紹介された女性とはいえ、相愛の関係で結ばれ、新居浜で幸せな新婚時代を送った。留学先のドイツでは、下宿先のハナ（Hana Kriegsmann）という若く美しく、優しい女性に慕われていた。忠雄は女性運には恵まれた人であったと言えよう。

女性にもてた彼は、三十歳で妻を失うと悲嘆に暮れたとはいうものの、一年後には堀恵子という、これまた理想的な素晴らしい女性にめぐり合う。彼女は残された何枚かの写真で見る限り、小柄ながらスマートなスタイル、容姿端麗な知的美人である。忠雄は三十を越えたとはいえ、未だ青年といってもよい風貌であった。身長は高く、眉目は秀麗、依然貴公子然としたところがあった。その頃の彼には、純情さを宿した青年学徒の面影が残っていたのである。堀恵子はそうした忠雄に惹かれたとしたい。二人の結婚は神の定めたものと、矢内原忠雄も堀恵子も次第に思うようになる。

さて、男女がたとえ婚約関係にあろうと、そう頻繁に会うことの出来なかった時代に、威力を発揮したのは、手紙である。矢内原忠雄が神戸一中時代から抜群の文章表現力の持ち主だったことは、これまでも再三再四言及してきた。それは堀恵子への愛の手紙からもうかがえる。わたしはつい忠雄と一高同期の芥川龍之介とを並べ、二人ともラブレターに抜群の才を発揮したことを想起してしまう。芥川が婚約中の塚本文に宛てた便りは、ユニークさに於いて愛の便りの見本のようなものだ。一方、矢内原忠雄もまたラブレターの名

手であった。右の堀恵子宛便りもなかなかのものだが、この年六月四日の恵子宛書簡の一節には、「夕方帰つたら六月二日附の御手紙が来てゐました。あなたに心配をかけました、といふよりもあなたがわたしと一しよに苦しんで下さいました。大浪の様な試練を乗り越へて私は再びあなたの愛の胸にしつかと受けとめられました。私此度は愛の競争であなたに美事にまけました。しかし負ける方が本当かも知れません」とある。これなど女心を見事に捉えた便りである。三十歳を越えた男の便りとは思えないほど、初々しい。

それでも結婚に至るまでには、さまざまな曲折があった。忠雄の義兄でもある藤井武は、自身を含め、離婚はむろんのこと、再婚にも否定的態度を示していた。藤井の「私が再婚を否定する理由」[14]では、再婚を五つの理由から否定している。その五つを簡略に紹介するなら、第一に一夫一妻は天地の公道である。第二に自分は妻の人格の品格を信じる。第三に死は暫時の不在に過ぎない。第四に子どもの「母意識」を傷つけることが出来ない。第五に自分の心もちが再婚を否定するというのである。

忠雄は右のような藤井の考えを十分承知していたが、カルヴァン（Jean Calvin）の言う予定説[15]に従うかのように、堀米吉・つるの四女恵子と再婚することを決心したのである。結婚の日は、一九二四（大正一三）年六月七日である。式は大阪の基督同信会集会所であげた。忠雄は再婚、恵子は初婚である。そのため恵子の実家近くの集会所が式場に選ばれ、招待者も恵子側が多かった。七月七日付で川西實三宛に出した結婚通知状の追い書きには、「さて私は表記の如く結婚をしました。勿論その前には沢山の苦慮と祈りとがありました次第です。今後のこと凡て神様の手中にあります」とある。神戸一中以来の先輩で、何かと世話になった川西實三すら結婚式には招いていないのである。再婚ゆえ、おおっぴらにするのを嫌ったのであろうか。忠雄は堀恵子との結婚を、あくまで神の「聖旨」と考え、再婚に踏み切ったのであった。

恵子夫人は、後年「身近にあった主人のこと」[16]というエッセイを書いている。その巻頭には、「私は主人に対してはすべてが感謝で御座いました。まず最初に主人のところへまいりました時には七輪に炭のおこしかたからお風呂のたきかたまで教えられたやっかいな私で御座いました」とある。堀米商店という関西の宝石時計店の令嬢として、深窓に育った恵子は、家事にはまったく疎かったことがよくわかる。けれども彼女はすぐ家事をマスターし、夫を支え、前妻の子伊作と光雄を愛し、以後の数奇な生涯を送ることになる。激動の時代の中で孤立せざるを得なかった矢内原忠雄の性格が次第に変わり、きびしい人となるということは、すでに記したが、その最大の被害者は、恵子夫人なのである。そのことは後章（「第九章　暗い時代を生きる」）で、詳しく述べることにする。

三　朝鮮・満州調査旅行

再婚した一九二四（大正一三）年の九月下旬から十月下旬までの一ヶ月、矢内原忠雄は朝鮮・満州の調査旅行に出かける。届け上は、いわゆる研究出張である。旅先から忠雄はいくつかの便りを、妻の恵子宛送っている。これらは幸い全集に収録されているので、

旅の様子が瞥見できる。九月三十日、東京の品川を発った矢内原忠雄は、十月一日、大阪着。二日夜大阪を出発、三日、下関港から連絡船に乗り、釜山に着く。『矢内原忠雄全集』第二十九巻に付せられた詳細な「年譜」には、釜山に着いた日に早くも百キロ弱離れた大邱まで行き、泊まったことになっている。翌四日には、これも同「年譜」によると、女子普通学校・男子普通学校・市場・片倉製糸工場参観とある（以下の旅程も主として、全集収録「年譜」による）。六日付矢内原恵子宛忠雄書簡には、「昨日は大邱を見物して大田迄来て泊りました」とあるので、五日は大邱の市内観光をしたようである。大邱は今日韓国第三の都市で、「りんごと美人の街」として知られるが、李氏朝鮮の時代から慶尚北道の経済・交通・文化の中心都市であった。大邱の市内観光の後、北西の大田に列車で移動、一泊する。大田は忠清南道の道庁のある町である。

翌六日は早朝大田を出発、全羅南道の三郷駅栄和農場へ行く。ここには妻恵子の弟堀和一がおり、出迎える。農場には三日いて、八日は木浦へ。木浦は全羅南道の西南端にある港町である。日本の植民地時代には、日本人が多く住み、穀物や木綿の集積地であった。木浦では日本基督教会系の教会で話をする。恵子宛の便りには、「夜のあつまりは小さな教会堂一杯の人であつた。僕は詩篇第三篇につき述べた。皆一生懸命に聞いてくれた。こんな聴衆を持つたことは僕は生れて始めてであつた」（矢内原恵子宛、一九二四・一〇・九付）と書いている。旅に出ても矢内原忠雄はよく聖書を読み、乞われるままに教会や家庭集会で説教をし、キリストの真理を伝えるのに余念がなかった。

九日は京幾道の水原に行き、山陽旅館に一泊。翌日、水原で農場視察を済ませ、京城（現、ソウル）へ向かう。京城には十月十五日まで滞在し、各地をめぐり、視察・調査に時間を費やす。総督府殖産局・商品陳列館・景福宮・京城帝国大学・総督府調査課・住友林業出張所・ベネディクト修道院などを訪れる。京城でも知人宅での祈祷会に出席したり、福音のメッセージを、「鮮人の青年会館」（鐘路青年会館）で行っている。恵子宛書簡には、「キリストの愛の証しを致しました。沢山の聴衆でした。此の青年会館は所謂不穏分子の巣窟と見られて居り、日本の政治に対する敵国の観がある処ですが、ここにて日本人が講演をしたのは一九一六年以来の出来事だといふ事でした。キリストの愛はうるはしいものと感じました。／信者以外の人も皆親切にして下され官庁側も会社側も色々と視察の便宜を与へてくれました。大学時代一つ下宿で親しくした人で相当に成功してる実業家等居ました」（矢内原恵子宛、一九二四・一〇・一六付）とある。隣の港町仁川にも行き、市内を視察している。

十六日は平壌に行く。右の恵子宛便りには、「平壌は景色のいゝ町です。役所の自動車で方々案内して貰ひました。大同江といふ川が流れて居ります。明日の夜半当地を去りて新義州へ向ふ予定。それからは満洲へ入ります」とある。平壌では海軍練炭工場・朝鮮電気興業会社・大日本製糖・靴下ゴム靴工場などを精力的に視察した。公立普通学校・長老系のミッションスクール崇実大学（朝鮮戦争後ソウルに再建）を視察し、神学校も見ている。

新義州は鴨緑江をはさんで中国と国境を接する街である。忠雄は列車で国境をわたり、十九日、奉天（現、瀋陽）に着く。満洲は二度目であった。一度目は一高二年の終わりの夏、一高の興風会という団体の企画したプログラムに参加しての旅であった。この旅のこ

とは、すでに第四章で取り上げている。奉天は満洲（中国東北部）にあって、最大の都市で、漢族ばかりでなく満洲族・回族・朝鮮族・モンゴル族なども住む。忠雄は到着翌日の二十日、城内宮殿（瀋陽故宮博物館）や普通学校を見学。二十一日は撫順へ。

撫順は炭坑の街として知られる。彼は大山坑やモンド瓦斯発電所、それに露天掘を見学した。その日は奉天に戻り、翌日は大連へ行く。大連は遼東半島の最南端に位置し、東に黄海、西に渤海、南は海を隔てて山東半島に面する。中国東北部第一の商港である。日露戦争を経て、当時は日本の直接統治（租借地）となっていた。二十三日は大連市に本社のある満鉄（南満州鉄道株式会社）を訪問、柏会の先輩、石川鉄雄に会う。他に地質研究所・中央試験所・窯業試験場などを見学している。二十四日には満鉄で「朝鮮旅行雑感」の講演をする。翌二十五日には、ハルピン丸に乗って大連を出帆し、帰国の途に着く。

矢内原忠雄の旅は、常に無駄なく、反面、強行軍との印象が伴う。欧米留学も、そして今回の朝鮮・満洲の旅にしても然りである。いまだ若く、生来頑健な彼は少しぐらい疲れても、寝ることですぐに元気を回復してきた。が、奉天や大連ではご馳走責めにあい、しかも脂っこい中華料理が主とあって、腹をこわしている。恵子宛の手紙にそれが読み取れる。例えば「ホテルでは朝の食事をするだけで、昼も晩もいつもご馳走ばかりになつてきた。しかし大連では稍暖い陽気であつたのと、用心したのとで奉天でわるくしたおなかがやつと昨日から平常に近く恢復をしました」（一九二四・一〇・二五、ハルピン丸にて）などとある。前にも記したが、忠雄はこの後も、よく腹をこわした。

恵子宛の手紙と言えば、忠雄は旅行中、しばしば恵子に便りし、文中で恵子を「恵ちゃん」と呼び、その愛を語り、神に感謝している。いくつか例を挙げると、「恵ちやん、御恵みにより元気にくらして居ますか。子供等も変りありませんか。さみしいだらうと思つて気毒になります。僕もさみしい時があります」（一九二四・一〇・九付）、「恵ちやんどうして暮して居ますか。僕は昨夜十時五十分京城を立ち今朝早く平壌に着きました。京城では三日及七日付の恵ちやんの手紙を貰ひました。十日位に出されたのがもう一通あるかと思つて度々郵便局へ行つたがとうとう得られずにしまつたので誰か具合でもわるいのでは無いかと心配になりました。どうぞ神様の御守りのうちに皆安らかである様にと祈ります大連へ行つて又お手紙を見るのをたのしみに致して居ます」（一九二四・一〇・一六付）、「恵ちやんとうとう恵子のところへ帰つて行く時が来た、一時間一時間とあなたの処へ近くなつて行きます、これ迄故障なく旅行がつゞけられ今なつかしい家へ帰つて行くことの出来るのを神様にあつく御礼申し度い」（一九二四・一〇・二七付）といった具合である。彼は恵子を心から愛する自分を、旅に出て再発見したかのようである。

矢内原忠雄の朝鮮・満洲旅行は、その植民政策論に一部ながら反映することとなる。彼の学術書『植民及植民政策』（有斐閣、一九二六・六）の巻末に収められた二つの論文が相当する。その一つ「朝鮮産米増殖計画に就て」（初出『農業経済研究』第二巻第一号、一九二六・二）では、朝鮮に於ける資本主義的植民の限界を説く。そして「朝鮮人の社会的必要は朝鮮人自ら最もよく之を知る。朝鮮人の社会的経済的生活に直接影響すべき政策の決定に、朝鮮人自身の意思の参加せしめられざる現状に於ては、如何に善意なる政策の遂行といへ

ども彼等の満足を期待することは性質上の困難事である」[17]との見解を示す。これは文献上のさまざまな操作とともに、現地研究の実感に支えられてのことばなのである。忠雄は植民地問題に誠実に、積極的にかかわっている。いま一つの「朝鮮統治の方針」（初出『中央公論』一九二六・六）は、より朝鮮民衆の立場に立っての論となる。冒頭の箇所を引用しよう。

明治四十三年八月二十二日日韓併合条約第一条、「韓国皇帝陛下は韓国全部に関する一切の統治権を完全且つ永久に日本国皇帝陛下に譲与す」。かくて「最後の韓国皇帝陛下」であられた李王が、本年（大正十五年）四月に薨去せられたのである。新聞によれば多数の朝鮮人が早朝より昌徳宮外に集まり来たつて、哀号したといふことである。薄明の李花地に墜ちて、白衣の民衆之がために哀哭す。聞く者をして感動せしむるの情景である。然るに騎馬巡査を始めとして警官隊は、之等の哀号の民が多人数同時に宮殿外に落ち合つて、一大群集となるに至らしめないやうに骨折つたといふ。彼等の間に馳駆して群集を分散せしめたといふことである。こゝに至つて何たる殺風景！

私共は当然大正八年時の李大王が薨ぜられたる当時を聯想回顧する。そのとき多数の民衆が哀悼のため京城に集まり来たつた。之を機会として、葬儀に定められし日の二日前、即ち三月一日を期してかの独立万歳事件が勃発したのであつた。京城パゴタ公園に於ける万歳唱和を第一声として、この運動は忽ちにして全鮮に蔓延し、四月半頃までに騒擾箇所四百以上に達した。この運動は非常に巧みに秘密裡に計画せられたものであつたから、官権の驚愕は一層甚だしく、各地に於て流血の惨事をみたのは、返す返すも遺憾であつた。この事件によりて総督府の武断政治に対する不信任は最も明白に暴露せられた。寺内総督は善意の武断政治家であつた。長谷川総督も同じ統治の方針であつた。行政官吏も学校職員も制服帯剣であつた。かくてサーベルの威力の下に朝鮮十三道は静謐であると思つて居た。何ぞはからん、突如たる独立万歳の声！もとより力弱き朝鮮民衆、しかも元来が平和的方法によりて独立の、或はむしろ独立希望の、意志を表明せんとしたるに過ぎざるこの運動が、蜂起箇所が四百であらうが五百であらうが、順次わが軍隊と警察とによりて鎮圧せられてしまつたに不思議はない。併し乍らこの事件は朝鮮民衆の勝利であつた。総督政府の敗北であつた。サーベル政治の破滅であつた。

三・一独立運動に関する、右に見られるような論が当時書けたのは、文献による朝鮮統治の実態を知り得たことと、現地調査あってのことなのである。矢内原忠雄は時の政府の肩を持つことなく、朝鮮民衆の実態に沿っての考えを公表する。彼には三・一独立運動の必然性が理解できた。それは朝鮮社会の実情をしっかりと見つめていたからのことであった。彼は植民政策研究の一学徒として、現実を直視し、先行の理論にも学び、植民問題を考えようとする。

植民地統治政策には、①従属政策　②同化政策　③自主政策の三つに分かれると忠雄は言い、「朝鮮に対する我が国の統治政策は上述三種のうち何れたるべきか」の問いを発し、イギリスやフランスの例を引きながら、考察を深める。彼には③の自主政策が最善であ

ることが分かっていた。彼は言う。「要するに朝鮮に社会上及び政治上自主的発展を遂げしめ、自主的地位を容認することは、正義の要求する処である」と。この三分類に関しては、忠雄没後浅田喬二ら一部ラジカルな研究者からの批判[18]もあったが、一九二四（大正一五）年当時に徹底した現地調査と文献調査によって裏付けられた推論は、そう簡単には否定できない重みを持つ。

矢内原忠雄は朝鮮旅行中、小学校や中学校、そして大学も見学していた。そうした体験をも踏まえて、「我国の植民地統治政策は一般的に同化主義の色彩を帯ぶ」という。続いて「法律も漸次内地法を延長するの形成である。教育もその骨子は内地教育である。朝鮮の普通学校（小学校に当る）の教科書は内地の国定教科書、又は之を基礎とせるものである。歴史も地理も内地の歴史地理を主とし、之に朝鮮の材料を点綴せるに過ぎない。教授用語は朝鮮語の時間以外は悉く日本語を強制せらる」と彼は書く。これではダメだと彼は直感的に感じているのである。民族の誇りとしての言語、朝鮮語による教育なくしては、植民政策としては失格であると彼は声を大にして言うのだ。

朝鮮視察旅行における見聞は、文献調査を補強し、彼の文章にリアリティーをもたらす。「法制慣習教育言語等の内地化即ち同化主義が朝鮮人の生活秩序を攪乱し、社会的不安を醸成したることは争はれない」との重要な指摘ができたのは、朝鮮民衆の生活をしっかりと見つめていたゆえのことだ。彼は「朝鮮は日本と別個の歴史的社会として取扱はねばならない。政策による同化は不可能である。故に同化政策は誤謬である」とはっきり言う。当時にあっては勇気ある発言と言わねばならぬ。さらには「朝鮮に社会上及び政治上自主的発展を遂げしめ、自主的地位を容認することは、正義の要求する処である」とも書きつけている。それは当時の日本政府の進めていた朝鮮植民政策に、真っ向から対立する見解であった。

四　台湾取材の旅

堀恵子と再婚し、朝鮮・満州調査旅行を行った年の翌年一九二五（大正一四）年六月、矢内原家は東京府荏原郡入新居町大字新井宿二一九二番地に引っ越した。大森八景坂上である。再婚二年目、生活はようやく落ち着き、矢内原忠雄は研究に没頭する。三男勝（かつ）が生まれるのは、一九二六（大正一五）年三月十三日のことである。三児の父となった彼は、東京女子大学への出講の日を除くと、授業がない日も本郷の大学に出かけ、一日中研究室に籠もって植民政策研究の講義準備と論文作成に全力を費やす。それが『植民及植民政策』（有斐閣、一九二六・六）以下の書物に結実するのであった。

『植民及植民政策』には、「愛敬と感謝とを以て本書を／新渡戸稲造先生／に献ず――生徒の一人たりし著者」との献辞がある。忠雄は恩師新渡戸稲造の学恩を終生忘れなかった。「新渡戸先生の学問と講義」[19]の一文では、「学者としての新渡戸先生がわれわれに残した最大の遺産は、特定の学説というよりも、むしろ人道主義を基調とする「人間」としての学問のあり方であろう。先生の植民政策の結論は、「原住民の利益を重んずべし」ということにあった」と言っている。矢内原忠雄の植民政策論の基調も、師譲りの原住民の利益優先にあった。処女論文「シオン運動（ユダヤ民族郷土建設運動）に就

て」（『経済学論集』一九二三・一〇）以来、矢内原忠雄は現地研究を怠っていない。現地研究によって得た直感を基とし、徹底した文献調査によって、理論は客体化されるのである。

他方、矢内原忠雄の講義は、準備が徹底していること、内容が豊かなこと、さらには声量・滑舌とも申し分ないことから、人気の的となる。忠雄は早くも東京帝大経済学部の花形教授となりつつあった。彼は講義と外国語と演習とを担当した。当時の忠雄の授業を受けた後年の東京都知事美濃部亮吉は、「講義は理論と実際問題に分かれていた。理論の方では、ローザ・ルクセンブルグの再生産方式のはなしをされ、帝国主義諸国の植民地への進出が必然的なものであることを理論的に立証されようとしておられたようである。実際の問題としては、アイルランドのはなしをうかがった。こちらの方は、その後発展して、『帝国主義下の台湾』などの名著になったのだと思われる」[20]と回想する。忠雄は理論と実際問題との統合のうえに、己の植民政策論を打ち立てようとしていたのである。

大正天皇が崩御し、時代は激動の昭和を迎えていた。一九二七（昭和二）年七月二十四日の未明、一高で同期だった芥川龍之介が東京田端の自宅で、劇薬（筆者注、近年は睡眠薬自殺ではなく、青酸カリ説が有力である）自死した。それは時代の苦悩を暗示するような死であった。こうした状況の中で、矢内原忠雄は台湾植民政策を次の対象に決め、己の研究テーマをより深めようとしたのである。当時の日本の植民地には、朝鮮・満州・台湾・南樺太・南洋群島などがあったが、忠雄はまず台湾に着目した。『植民政策の新基調』（弘文堂、一九二七・二）が刊行された頃、忠雄は大阪豊中に住む妹悦子宛の便りに、「僕の著書がまた一つ出ました。「植民政策の新基調」といふ書名で京都の本屋から出版しました。今度は十冊しか本屋がくれませんので、あなた方へ差上げる余裕がありません。学校の同僚達に進呈する分にも足りません。／僕は三月中頃から台湾へ行くはづです。約一ヶ月位の予定で。」（田原悦子宛、一九二七・二・五付、なお、全集収録のこの書簡は、大正一五［一九二六］年のところに入れられているが、昭和二［一九二七］年が正しい）と書いている。

矢内原忠雄は一九二七（昭和二）年三月十八日、東京を発ち、十九日神戸港を出帆、台湾に向かった。船中東京帝大法学部生の陳茂源とことばを交わす。陳はのち忠雄の集会の常連となり、戦後国立台湾大学教授となった。船は二十二日に基隆（チーロン）港に着いた。基隆は台湾北部の港町で、船旅時代の当時は台湾の玄関口であった。台湾人の蔡培火らが出迎えた。蔡培火は東京高等師範学校在学中に植村正久の影響を受けたクリスチャンで、台湾民族解放運動の幹部として台湾議会設置運動に尽力していた。彼は忠雄の『植民及植民政策』を読み、大森八景坂上の矢内原邸を訪ねて、忠雄に議会請願運動の相談に乗って貰うことがあった。そういう関係から忠雄は、台湾各地の案内役を依頼したのである。蔡培火には、「神の忠僕矢内原忠雄先生を憶う」[21]の一文がある。

基隆に上陸した矢内原忠雄は、まず台北（タイペイ）へ行く。そして三井物産・総督府などを訪問する。総督府では米や水利事業や金融などについて聞く。最初の十日ほどは、台北を中心に北投（ペイトウ）・桃園（タオユエン）なども視察する。北投は台北の北に位置する台湾最大の温泉郷である。ここでは周辺の水田などを視察。桃園は台北と新竹（シンツー）の中間地にあり、古くから交易都市として栄えたところ。その後、四月一日は午前中、大渓（ターシー）郡役所を訪問する。大渓は台北の南西約三十キロ、樟脳や

茶・柑橘類を特産品とする自然に恵まれた歴史のある街として知られる。午後、列車で桃園経由夕方台中に着く。台中駅には葉栄鐘らが出迎えた。駅からはすぐに台湾民族解放運動の指導者林献堂をその自宅に訪問する。林献堂を忠雄の紹介したのは、蔡培火だとされている。[22] 林は「品格高潔」の台湾人であり、日本の植民地下の台湾で、人望を集めた人物である。忠雄は視察予定の竹山行きを考え、現地入りの紹介状を書いて貰いたかったのであろう。

台中は台北と高雄の中間に位置する大都市である。忠雄の視察旅行では落とせない重要な街であった。台中には歴史的建造物も多い。四月二日には台中洲庁をはじめ、影化銀行・大東信託・帝国製糖などを訪問する。葉栄鐘は台中到着後の忠雄の手足となって各地を案内した。葉は台中駅に忠雄を迎えたのが初対面であった。が、彼は実に誠実に忠雄の調査旅行に協力した。葉栄鐘の「矢内原先生と台湾」[23] に、忠雄の旅の様子が詳しく印されている。三日は豊原方面を調査し、四日は大肚に行く。大肚では農民総会に出席し、無料開墾および保管林問題の話を聞く。現場視察の後、台湾中部の穀倉地帯の中心地彰化に寄る。寺や廟の多い街である。ここでは青果同業組合・青果会社の調査に当たる。この日は台中に戻る。

四月五日は台中から鉄道で南下し、林内で下車、葉栄鐘の案内により台車で竹山へ。竹山は竹材とタケノコの産地で、竹林事件[24]の起きた山中の町である。忠雄は事件の背景を考えるため、竹林の実地調査をし、地元の有力者林月汀らから聞き書きをしている。その日は竹山に泊まった。六日は竹山を早朝出発、林内を経て嘉義へ。七日は嘉義の洲庁で資料を貰い、製塩会社・専売局製塩所などを視察の後、台南市に移動して泊まる。台南は台湾に最初に首府が置かれた台湾最古の街である。八日は台南から南下し、高雄へ行く。高雄は台湾南部の中枢都市で、台湾海峡に面する良港がある。日本政府により本格的築港がされ、産業都市として発展中であった。忠雄は例によって、まず州庁に行き、資料を貰い、港と壽山を見学した。壽山は珊瑚性石灰岩でできた海抜三六五メートルほどの山と言うよりも、小高い丘である。萬壽山とも言われ、全山が公園になっている。九日は鳳山へ。

十日は高雄の東、約二十五キロの屏東へ。砂糖の生産で知られた街である。ここでは屏東台湾製糖会社などを訪問し、調査に当たった。十日は屏東での調査を続行し、夜は図書館で講演をした。蔡培火が通訳に当たる。十一日は屏東を発って北上、再び台南に寄り、台湾長老教会のマックロード宣教師を訪ね、その学校を視察した。また、孔子廟や開山神社を見物、夜は公会堂で講演。十二日は台南を去って嘉義に戻り、嘉義公会堂庭園でも講演をする。以後、いくつもの箇所での講演をこなす。屏東以後、矢内原忠雄は各地でしきりに話をする羽目に陥っていた。矢内原恵子宛書簡（一九二七・四・一六付）に、このことの釈明があるので、煩をいとわず引用しよう。

> 僕は今、礁渓といふ処に来て居ます。こゝは台湾の東北部で宜蘭といふ町の北方二里の温泉場です。こゝで一日、旅行の疲れを静養しました。これまでといふものは毎日本当に忙しい旅行でありました。ずつと南部の屏東といふ所まで行きましたが、それ迄は格別のことも無かつたのですが、講演を承諾して十日には屏東十一日台南、十二日嘉義十三日は彰化と台中と二ヶ所、十四日には新竹、十五日には宜蘭と連日の講演のため

すつかり疲れてしまひました。殊に僕の講演に対しては警察側よりの注意と、台湾人側よりも少数者の反対的妨害運動が起つたゝめ、一方ならぬ気苦労でありました。僕は台湾を愛する心と蔡培火氏に対する友情とから此の講演を承諾したのですが、結果は苦痛を刈り取つたものでした。途中から止めたくなりましたが各地とも準備ずみのことゝて最後の数日は全く十字架にでもつく位の気持ちで引つぱりまわされました。講演場は何処でも一杯の聴衆で多い処では千四五百人を越えやうといふ有様、門前にはいろんな物売りが集つてきて縁日のやうに賑やかでしたよ。

講演を引き受けたことは実際失敗でした。東京を発つ前から頼まれたのですがずつと断つて居たのです。それを終に承知したのは例の僕の気質で、勇気余つて思慮足らぬ結果でした。僕はこの講演のため随分各方面より誤解も批難もにくしみも受けました。しかしすんだ事は仕方がない、之も一つの経験でした。之によりて始めて学び得た処も尠くはないのです。キリストは最も深く人を愛し国を愛せられました。そしてキリストほど多くの人に誤解され攻撃された方もありません。彼は深く愛したるが故に世から領解せられませんでした。彼は全く孤独であられました。屡々人無き処に退いて祈られました。十字架は深く愛する人の孤独を象徴するものと言ひ得ませう。

台湾視察旅行中の矢内原忠雄の苦渋と孤独を語る便りである。こうしたことは忠雄の以後の研究生活に、しばしば起こった。よかれと思って引き受けた講演で誤解と非難を受けた彼の心情が、ここには素直に語られている。忠雄はその後、十七日夜、台北幸町長老教会で説教をし、十八日は台北の中央研究所・植物園・農事試験場などを視察している。十九日からは台湾東海岸を視察のため、台北から列車で、東海岸の蘇澳（スーアオ）に出、そこから撫順丸に乗り、二十日、台湾東部最大の都市花蓮（ホワリエン）に上陸する。花蓮では大理石の峡谷、太魯閣（タロコ）峡谷（タツキリ渓谷）を見物している。二十一日は鉄道で南下し、玉里（ユイリー）へ。翌日はさらに南の台東（タイトン）まで行く。台東では台東製糖会社・馬蘭社・卑南社・台湾浮浪人収容所などを視察した。二十三日は台東から帰途に就き、里瓏（リラン）で泊まる。二十四日花蓮港から船出し、二十五日台北に戻る。休む暇もない視察の旅であった。四月二十七日には長官官邸で「民族運動と階級運動」と題して講演。二十八日、基隆から帰国の途に就いた。

約一ヶ月半に及ぶ旅を通し、矢内原忠雄は実によく台湾各地を視察したことになる。西海岸から東海岸の町々を鉄道の通っていないところは台車に乗って行った。まさに台湾の津津浦浦をめぐったことになる。が、強行軍の台湾への旅は、以後の忠雄の健康に大きな影響を与えた。後年『葡萄』[25]に連載した「思ひ出（五）」（『葡萄』八号、一九三九・五）に、彼は「元来私は何も病気をもたぬ身体で、健康体であつた。かういふ身体に生んでくれた父母に対し、私は感謝の念を抱いてゐる。それを今のやうな身体にしてしまつたのは、私の責任である。併しそれは私の生活がふしだらであったからではなく、公の事の為めの過労からであつた。／私が最初に健康を損じたのは、昭和二年の台湾旅行からである。私は蔡培火氏の志に感じ、氏を援助する為めに、台湾各地で数回の公開演説をした。之は全く私の予定外の行動であつて、その為めに非常に心身を疲労させた。

四十日間の激しい旅行を終へてやつと海上に解放された私は、基隆から乗船した翌日から突然腸が痛んだ。之が今に至つても尚全治せず、私を困らせてゐる疾患の始まりである」と記している。

帰国に際して、基隆港には蔡培火が見送りに来た。二十八日付蔡培火宛船中からの便りには、「台湾は私の愛する土地となりました。あなたあるが故に私は台湾を愛します。私の台湾に対する愛はあなたに対する愛です。私はあなたを友として与へられて内地へ帰つて行きます。あなたを識るが為めに神様は私を台湾へ導き下されたものと思はれます」と書いている。何とも心温まるうるわしい便りである。蔡培火が感激したことは言うまでもない。

蔡培火は台湾のため闘っていた。議会請願運動を日本政府に求め、私服警官の尾行の就く身であった。忠雄はそうした状況にあった蔡培火に同情したのである。彼の「寂寞孤独」を共に味わいたいと言っている。が、忠雄自身がやがては同じ身になろうとは、まだ予測もつかないことであった。矢内原忠雄の台湾行きは、のち『帝国主義下の台湾』（岩波書店、一九二九・一〇）に結実する。この本は先の『植民及植民政策』とともに、矢内原忠雄の植民政策研究の代表的著書としてよい。『帝国主義下の台湾』に関しては、次章（第八章）冒頭で取り上げる。

注1　関口安義『評伝長崎太郎』日本エディタースクール出版部、二〇一〇年一〇月二〇日。一三九ページ

2　長崎太郎『佐々木惣一先生と私』私家版、一九七〇年六月一日

3　矢内原忠雄「大陸経営と移植民教育」『教育』一九三七年一月一日、のち『矢内原忠雄全集』第五巻収録。一一一ページ

4　矢内原伊作『矢内原忠雄伝』みすず書房、一九九八年七月二三日。三六一ページ

5　矢内原忠雄「第二イザヤ書講義」『嘉信』第二巻第一〇号（一九三九・一〇）～第三巻第二号（一九四〇・二）、のち『矢内原忠雄全集』第一二巻収録。五一八ページ

6　注4に同じ。三七二ページ

7　矢内原忠雄「私の伝道生涯」『橄欖』12号、一九五三年六月、のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。一九〇～一九一ページ

8　大塚久雄「東大聖書研究会のこと」『経友』20・21合併号。一九六二年五月、のち『社会科学と信仰の間』図書新聞社、一九六七年一〇月一日収録。三三三～三三七ページ

9　矢内原忠雄『私の歩んできた道』東京大学出版部、一九五八年三月三一日、のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。そこには「処女論文―シオン運動論」の小見出しのある箇所がある。二八ページ

10　注9に同じ。二九ページ

11　大内兵衛「赤い落日―矢内原忠雄君の一生」『世界』一九六二年三月一日、のち『高い山―人物アルバム』岩波書店、一九六三年一〇月一〇日収録。一一二～一一三ページ

12　中村勝己「矢内原忠雄と経済学」『内村鑑三と矢内原忠雄』リブロポート、一九八一年一月三〇日収録。二一三ページ

13　注4に同じ。三七四ページ

14　藤井武「私が再婚を否定する理由」『旧約と新約』一九二五年七月、のち『聖書の結婚観』岩波書店、一九二五年一二月二五日収録。一一四～一二八ページ

15　キリスト教神学において、人間の歩む道はあらかじめ神によって定め

られているという説。カルヴァン（Jean Calvin）は、『キリスト教綱要』においてそれを理論化した。

16　矢内原恵子「身近かにあった主人のこと」『矢内原忠雄全集』月報29、一九六五年七月二九日、のち南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、一九六八年八月三日収録。六六七～六七〇ページ

17　矢内原忠雄「朝鮮産米増殖計画に就て」『農業経済研究』第2巻第1号、『植民政策の新基調』一九二六年二月五日収録、のち『矢内原忠雄全集』第一巻に収録。七二二ページ

18　浅田喬二『日本知識人の植民地認識』校倉書房、一九八五年四月二五日。一九ページ

19　矢内原忠雄『新渡戸先生の学問と講義』『書斎の窓』第20号、一九五五年二月、のち『矢内原忠雄全集』第二四巻収録。七二四ページ

20　美濃部亮吉「矢内原先生」『矢内原忠雄全集』月報10、一九六三年一二月、のち南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、一九六八年八月三日収録。八一～八四ページ

21　蔡培火「神の忠僕矢内原忠雄先生を憶う」南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、一九六八年八月三日。九二～九九ページ

22　若林正丈「台湾との関わり―花瓶の思い出」鴨下重彦・木畑洋一・池田信雄・川中子義勝編『矢内原忠雄』東京大学出版会、二〇一一年一一月二日。一〇八～一二九ページ

23　葉栄鐘「矢内原先生と台湾」『矢内原忠雄全集』月報26、一九六三年四月、のち南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、一九六八年八月三日収録。九九～一〇八ページ

24　竹林事件　台湾中部の竹山（ツーサン）で起こった事件。竹山を中心に、台中・台南両州には、豊かな竹林が広がり、五千幾百戸もの地元民が竹材やタケノコなどを採取して生計を立てていたが、主権不明確をもって官有地に認定された。一九一〇（明治四三）年、台湾総督府は林内（リンネイ）に設立された三菱製紙会社に、この竹林の経営を委託した。そのため地元民の竹林利用が禁止され、生計の途を失う者が生じた。竹林事件というのは、この処置に不満を持った民衆が、巡査派出所を襲撃した事件を指す。竹山はこの二十年後の一九三〇（昭和五）年に起きた、日本統治下の台湾最大の悲劇、霧社（むしゃ）事件の霧社にも近い。

25　『葡萄』という謄写版刷りの通信紙は、一九三八（昭和一五）年一〇月刊。当初月一回のペースで刊行され、八号でいったん休刊し、一九三九年一〇月復刊。以後不定期刊で第二次世界大戦後の一九四七（昭和二二）年七月まで続く。謄写版刷りの原本は、東京目黒の今井館資料館にあり、活字復刻版がみすず書房から一九六七年一〇月二五日付で刊行されている、この時期の矢内原忠雄を知るのにきわめて重要な文献である。

受領日　二〇一四年八月二十八日
受理日　二〇一四年十一月十二日